

怨霊の群れに身を捧げし女霊能者の狂態

……いまは廃墟と化したその場所で、かつて忌まわしい事件が起きたことを知っている者は決して少なくない。当時、事件が発覚するや否や、ニュース番組や新聞等で大きく報じられたし、いまなおその事件に関しては地元でひっそりと語り次がれているからだ。

N県G市の郊外にその廃墟と化した建物がある。市街地から田園地帯を車で走ること三〇分、うつそうとした木々が生い茂る山の中にポツンと孤立した状態で建っているその建物は、かつては終末期ケアを主な業務としていた医療センターの成れの果てだ。ここにはかつて、末期のガン患者をはじめ、回復の見込みのない不治の病に侵された患者が多く入院していた。ほとんどの者が余命を宣告された身であったが、それでも彼らは残された時間を懸命に生きていた者たちであった。

ここが事件の舞台となった。

後の捜査によって判明した最初の事件は、事件発覚の一年前におこなわれていた。犠牲者となったのは六十代の男性患者で、彼は末期の肺ガンを患っていた。医師から宣告された余命は三ヶ月で、酸素吸入器をつけた生活を余儀なくされていたが、それでも彼は残された時間を懸命に生きようと、外の景色を眺めて詩を書いたり、家族との面会を楽しみながら穏やかに生命のカレンダーを消費していた。

そんな彼が、ある夜、突然、死を迎えた。深夜、ナースコールを受けて駆けつけた看護師がその様子を目撃している。男性はナースコールを握りしめたままベッド上でもがき苦しみ、口から泡を吐きながら、喉を掻き毟り、顔に苦悶の表情を浮かべて目を充

血させていた。すぐに医師が呼ばれ、緊急の処置がおこなわれたが、彼らの懸命の対応は結局報われることなく男性はそのまま息を引き取った。

医師は男性の死を不審に思いつつも、大して調べもせずに「病死」という結論を下すと、遺体をお悔やみの言葉と一緒に遺族に引き渡すと、この件に関しては落着とした。だが、事件はこれが始まりに過ぎなかった。

最初の犠牲者が出てから半月後、同じような症状で亡くなる患者が出現した。今度は五十代の男性で、末期のエイズ患者だった。彼の死から一〇日後、やはり同じような症状で亡くなる者がまた出た。七十代の呼吸器疾患を患っている男性患者だった。その後も次々と同じような症状を発症してもだえ苦しみながら死んでいく者が相次いだ。

当所、最初の犠牲者と同じような症状で死んでいった者は、月に二、三人程度の割合だったが、その後は週単位で増えていき、事件が発覚する直前には一週間で五人もの患者が亡くなるまでになっていた。その数、実に一六三名。これほど膨大な数の死者が出ているにも関わらず、事件の発覚が遅れた理由は、事件の舞台となった場所が終末期医療センターという特殊な場所だったからに他ならない。それでも、あまりの尋常ではない惨状に、医師や看護師たちも薄々は不審に思っていたようだ。

事件の発覚は内部通報によるものであった。

警察に匿名で、

「ナースのひとりが患者の点滴袋に消毒薬を入れているのを見た」

という通報があったのだ。

この頃、すでに警察でもG市の終末期医療センターで相次いでいる不審死の件は公然の話題になっていたから、警察はすぐに動

いた。医療センターに強制捜査で踏み込むと、大量の資料を押収したのである。その中には医療センター側が仕掛けていた監視カメラの映像が含まれており、その中にわずかではあったが犯行の一部始終を捕らえた映像が含まれていたのである。

この映像が決め手となって逮捕されたのは、菅野明巳という入社三年目の二十代の若いナースであった。彼女は最初、事件への関与を否定し、無実を訴えて弁護士を呼べとまくし立てていたが、次々と犯行の証拠を提示されると、観念したのか、逮捕から五日後に自らの犯行だと自白したのだが、その動機は驚くべきものであった。

「どうしてこんなことをしたのか？」

という刑事からの問いかけに対して、菅野は平然とした態度で答えたのである。

「醜かったから」

「え？」

「だーかーらー、醜かったから殺したの！」

醜かったから——骨と皮ばかりになっても、それでもなおおも生に執着して生きようとしている患者の姿が醜かったから殺したのだと彼女は言った。

「……」

刑事は啞然としたが、それでもまだ他に聞くべきことがあった。それは、被害者が全員、男性だったという点だ。これに対しても彼女は平然と答えた。

「男が生まれながら醜い生き物だからよ。男は死んで当然のおぞましい生命体なの。だからわたしが殺したの。文句ある？」

「……」

警察の調べによると、菅野には学生時代にレイプされた経験があった。所属していたサークルの飲み会の席にて、酔った彼女を

複数の男たちがよってたかって彼女を強姦したのだ。以来、彼女は極度の男性不審に陥ったという。

その後、起訴された彼女は、事件当時、過去のレイプ事件が原因で心理的に不安定な状態にあり、重度の心神喪失による無罪を訴えて裁判を争ったが、最終的には死刑になった。

N県地方裁判所の裁判長は、彼女の過去に深く同情しながらも、それが犯した罪を肯定する理由には値しないと断罪した。怒った菅野は上告したが、結局、最高裁判所でも判決は覆らず、刑が確定した五年後、彼女の死刑が執行された。

菅野の最後の言葉は、

「わたしは悪くない！ 悪くないもん！」
だったという。

この間に、事件の舞台となった終末期医療センターは、業績不振から経営が悪化し、閉鎖され、放置されるに至った。医療センターを運営していた社会福祉法人もその責任を問われて解散となり、当時の理事長が書類送検となった。務めていた職員たちも、忌まわしい事件現場からまるで逃げるように去り、各地に散ってもう会うこともなかった。

これで全てが終わった——かと思われた。

しかし、廃墟と化した医療センターで、無念の死を遂げた者たちが、憎悪と怨念を増幅させながらなおも蠢き続けているということに、多くの者は気づいてすらいなかった。

そして三〇年の月日が流れた……。

続きは本編にて